

# 女子少年院在院者の家族画からみた特徴について

酒井 澄

打田 茉莉

鈴木 義子

(榛名女子学園)

## 1 女子少年院在院者の特徴について

### (1) 女子少年院の処遇課程について

女子少年院の場合、同一施設内に複数の処遇課程を併合しており、年齢、能力、非行性の深度等に応じた分類処遇を徹底して行うことができず、したがって多種多様な者を対象として教育を行っている。ほとんどの施設が長期処遇と短期処遇の両課程を有しており、また、種別でも、初等少年院、中等少年院、特別少年院、そして場合によっては、医療少年院の者までを対象とする。施設収容体験がまったく初めての者が大半ではあるが、少年院が2度目、3度目という者も含まれることもある。

しかも、収容数全体としては、さほど大きくない少年院が大部分のため、構造上も、職員数も概ね規模が小さく、混合収容を余儀なくされており、対象者のニーズにあわせた教育活動を展開するのが困難な状態にあるのが実情である。

### (2) 統計上からみた女子少年院在院者の特徴について

表1に示すように、年齢別人員や非行名別人員からみても、少年院在院者の女子と男子とではかなり相違のあることがわかる。

まず、年齢からみると、女子の場合は、16歳、17歳が2割を越え、次いで15歳、19歳の順に多いのに対し、男子の場合は、18

歳、19歳が多く、次いで17歳であり、14歳、15歳の占める割合は10%を下回る。

このことは、非行とも関係している。女子の場合、凶悪犯と言われる殺人、放火、強盗強姦が0であるのに対し、男子の場合は、6.7%を占める。また、男子では、窃盗が第1位で44.3%と高いのに対し、女子では、16.7%であり、3位である。女子で最も高いのはぐ犯であり、32.4%を占め、次いで覚醒剤法犯の20.1%である。傷害は男女ともに9%であるが、傷害致死は、女子では皆無であるのに、男子では、1%を占める。女子では、毒劇物法犯が高率(9.5%)を占め、道交法犯は少ない(2.9%)が、男子では逆に、道交法犯が9.2%、毒劇物法犯は5.8%である。

また、年齢との関係でみると、女子の場合、窃盗は15歳が最多で、16歳、17歳と多いが、18歳、19歳になると少なくなる。これに対し、男子では、18歳が最多であるものの、17歳、19歳もほぼ同じ程度の割合である。恐喝も女子は、16歳、17歳が多いが、男子では17歳、18歳、19歳が多い。薬物乱用関係では、女子の場合19歳が最も多いものの、17歳から覚醒剤法犯が急増し、しかも、毒劇物法犯も17歳が最も多く、18歳以降は急減する。これに対し、男子の場合、覚醒剤法犯は19歳、18歳に多く、毒劇物法犯は16歳から19歳まではほぼ同じ程度の割合であり、加齢とともに減少する傾向は見られない。

表1 少年院新収容者の年齢別非行別人員

非行名		年齢							
		計	14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳
計	女	558 (100%)	65 (11.6)	91 (16.3)	118 (21.1)	129 (23.1)	70 (12.5)	85 (15.2)	0
	男	4,253 (100%)	177 (4.2)	369 (8.7)	645 (15.2)	951 (22.4)	1,076 (25.3)	1,029 (24.2)	6 (0.1)
殺人		0 30(0.7%)	0 1	0 1	0 5	0 10	0 7	0 6	0 0
強盗致傷		0 61(1.4)	0 3	0 2	0 9	0 22	0 12	0 13	0 0
強姦致傷		4(0.7) 196(4.6)	0 0	0 15	3 29	0 45	0 47	1 60	0 0
傷害		50(9.0) 399(9.4)	6 30	9 40	20 49	12 83	0 102	3 94	0 1
傷害致死		0 44(1.0)	0 1	0 0	0 6	0 17	0 20	0 0	0 0
暴行		3(0.5) 35(0.8)	0 2	1 3	2 6	0 5	0 10	0 9	0 0
わいせつ 致傷		0 38(0.9)	0 2	0 5	0 3	0 6	0 9	0 13	0 0
恐喝		16(2.9) 208(4.9)	3 5	1 12	6 32	5 52	1 54	0 53	0 0
窃盗		93(16.7) 1,883(44.3)	13 85	21 195	18 311	19 411	9 461	13 420	0 0
その他の 刑法犯		24(4.3) 369(8.7)	1 9	3 17	5 54	3 72	5 100	7 117	0 0
覚せい剤		112(20.0) 141( 3.3)	2 1	0 0	9 6	30 6	24 46	47 82	0 0
毒劇物		53(9.5) 247(5.8)	4 3	5 14	11 53	20 59	7 60	6 58	0 0
道交法		16(2.9) 391(9.2)	3 2	6 11	3 52	1 126	2 121	1 79	0 0
その他の 特別法犯		4(0.7) 32(0.8)	0 0	0 1	0 2	2 7	2 9	0 13	0 0
ぐ 犯		181(32.4) 179( 4.2)	33 33	45 53	40 28	37 30	19 18	7 12	0 5

(矯正統計年報 平成元年による)  
(表中上段：女子)

以上のことから、女子では、凶悪犯罪を犯した者は少なく、窃盗といっても、低年齢者に多いことから、おそらく手口の単純な万引きなどが多いものと思われる。また、覚醒剤法犯については、乱用開始の年齢が男子より早く、しかも覚醒剤乱用が始まるが、年齢が18歳以降になると毒劇物乱用に至らなくなる。

## 2 女子少年院在院者の家族関係

### (1) 保護環境

保護状況については表2のとおりである。

実父母の占める割合が、男子に比べて10%ほど低い。男子も過半数を割っているが、女子ではさらにそれより低く、4割を下回っている。その分実母のみ及び義父実母の割合が少し高い。

生育史をみてみると、単に義理の父母ということに問題があるのではなく、現在のそのような状態に至るまでに、何人かの親がいたり、引き取った親の都合で別れた相手方に押しつけられたといったことを体験している者が多く、非行をされては困るが、そうならないために親としての責任でなんとかしようと

表2 少年院在院者の保護者別人員

保護者	年	62		63		元 年	比 率
			比 率		比 率		
女 子	計	583	100.0	577	100.0	558	100.0
	実父母	243	41.7	226	39.2	213	38.2
	実 父	66	11.3	71	12.3	75	13.4
	実 母	137	23.5	153	26.5	151	27.1
	実父義母	39	6.7	35	6.1	38	6.8
	義父実母	55	9.4	47	8.1	49	8.8
	養父(母)	13	2.2	24	4.2	6	1.1
	その他	22	3.8	18	3.1	22	3.9
	な し	8	1.4	2	0.3	3	0.5
	不 詳	0	0.0	1	0.2	1	0.2
男 子	計	4,639	100.0	4,254	100.0	4,253	100.0
	実父母	2,274	49.0	2,081	48.9	2,067	48.6
	実 父	624	13.5	589	13.8	533	12.5
	実 母	956	20.6	863	20.3	946	22.2
	実父義母	286	6.2	254	6.0	242	5.7
	義父実母	259	5.6	262	6.2	254	6.0
	養父(母)	50	1.1	47	1.1	54	1.3
	その他	133	2.9	110	2.6	122	2.9
	な し	46	1.0	46	1.1	32	0.8
	不 詳	11	0.2	2	0.0	3	0.1

の意欲を示す保護者は少ない。

### (2) 保護者の養育態度

少年院在院者全体については不明であるが、限られた少年院及び少年鑑別所の統計から推測するに、女子少年院在院者の保護者の養育態度としては、放任や一貫性のなさ、無関心が多い。拒否や厳格は少ないが、場当たりの対応することに問題があるといえる。

### (3) 保護者の問題

一番多いのは、父母の離婚であり、次いで、しつけ不足（指導力欠如）や本人疎外である。保護状況や養育態度の項で述べたように、父母の離婚や葛藤の背景には、父親の暴力や酒乱、あるいは相互の浮気といった原因があり、表面化する以前から長期間家庭内が不安定な状態にあったことが多く、保護者自身が不安定なために、子供にまできめ細かな気配りを行っている余裕がない。同胞間の葛藤に、親が対等に扱うことを意識せずに対処するため、本人は疎外感や被差別感を抱き、ひがんだり、自棄的になったりしやすい。

## 3 矯正教育における家族問題

### (1) 問題性別指導

前述したように、女子少年院在院者の保護状況は著しく劣悪であり、男子少年に比較しても大きな相違点である。こうした家庭状況の中で養育され、しつけ不足や放任のために自分を大切にしたい生き方ができず、困難な事態を避け、安直に対応しようとする。しかも出院すれば、大半の者は同じ境遇の中で生活していかなければならないので、家族とどう係わっていけばよいかを考えさせることは、主要な教育目標の一つである。

そこで、問題性別指導の課題の一つとして「家族」を取り上げている少年院が多い。家族にかけた迷惑について振り返らせ、親の立場や子の立場について考えさせたり、これか

らの家族との係わり方や家族の一員としてできること等について考えさせる。

### (2) 面会・通信

少年院在院中の面会・通信の許可されるのは、保護者や保護司等に限られることもあって、入院前には保護者との関係が悪化していた者も、離れてみて親の有り難さがわかったり、家族にかけた迷惑等について考え直してみることができるようになることが多い。

出院時の挨拶の中でも、学園生活の中でくじけそうになった時、それを支えてくれたのは家族の面会だったと述べられることが多い。心配してくれる、待っていてくれるということがわかると、目標を持ちやすく、家族の一員としての責任感を自覚し、行動を抑制するようになる。

しかし、中には、これまで何回もいいことを言っていたのを信用しては裏切られたために、手紙で本人が何と言ってこようと信用できないと、少年院で面会を促しても来ない保護者がいる。また、手紙では素直に話ができるようになったのに、いざ面会すると従前のようにぎこちなく感情的になって、お互いに気まずい思いで別れることになる親もいる。あるいは、子供に甘く、これまでつきあっていた友達の近況を問われるままに教えてやったり、子供の言いなりに買う約束をするなどご機嫌を取る親もいる。話の内容や状況によっては、面会を中断したり、その場で指導することもあり、場合によっては、面会の前後に、本人及び保護者に個々に指導することも多々ある。

通信については、その内容や文章について直接指導することはないが、内容によっては事情を聞いて保護者の誤解を招かないよう説明させたりすることはある。

こうした家族間の調整には、指導上数多くの問題点はあるものの女子非行少年の処遇には、家族との関連が重要な要因となるものだけに、家族に対して、女子少年がどのような

係わり方や認知をしているかについて知ることが必要である。

これらの調査の方法として、従来からさまざまな方法がとられているが、このたび榛名女子学園をはじめ女子少年院で実施した家族画を中心に、女子収容少年の家族に対する係わり方の特徴を検討することとした。

#### 4 研究方法

##### (1)実施方法

###### ア 実施時期と場所及び対象者

平成元年10月～11月にかけて、全国の女子少年院のうち、沖縄女子学園を除く8か所に在院している者を対象に、それぞれの施設職員が実施した。対象者の年齢は、14歳から20歳までであり、一般短期処遇及び長期処遇の両課程が含まれている。ただし、今回分析の対象としたのは、このうちの258名である。

###### イ 教示の仕方

家族画については、「あなたの家族というテーマで家族の絵を描いてください。」というインストラクションを与える。B4版の画用紙に、鉛筆、消しゴム、12色の色鉛筆を与え、色を塗るように教示する。

時間は概ね1時間程度とし、終わらなけれ

ば強制はせず、時間を延長する。

なお、描き終わった後、家族画の説明をさせたところとそうでないところがあった。質問紙調査及びSCTについては、思ったとおりに答えるように教示した。

##### (2) 分析方法

###### ア 家族画について

今回分析の対象としたのは、人物が描かれ、しかもマンガ絵か写実絵か判定のつくものであり、総数は258枚である。施設別人員は、表3に示すとおりである。

ここでいう「マンガ絵」とは、大きな目でしかもその全部を黒く塗りつぶして、ひとみと、白い部分が欠如しているか、又は、単に一本の線で表されていることと、鼻の省略されていることに着目した。描画全体からみて、能力的に劣るために、鼻が脱落していたり、人物の表情が笑っているために、単に一本の線で目が描かれているなどの場合はマンガ絵に分類しない。

また、「マンガ絵」に対して、実物のように描こうとしている家族画を、「写実絵」とし、そのどちらにも該当しないもの（例えば顔の明細化のないものや後向きなど）は除外した。

表 3 施設別マンガ絵、写実絵別人員

	計	マンガ絵				写実絵			
		小計	顔面像	胸像	全身像	小計	顔面像	胸像	全身像
	258	175	25	65	85	83	8	40	35
紫 明	37	27	0	12	15	10	1	6	3
青 葉	20	8	0	0	8	12	1	4	7
榛 名	63	47	15	21	11	16	3	9	4
愛 光	37	29	4	9	16	8	0	6	2
交 野	39	27	3	14	10	12	2	6	4
貴 船原	18	6	0	2	4	12	1	3	8
丸 亀	18	11	0	0	11	7	0	4	3
筑 紫	26	20	3	7	10	6	0	2	4

次いで、人物の部位によって、3つに分類した。A；頭部から首までしか描かれていないもの（頭部顔面のみで首のないものを含む。以下これを顔面群と称す。） B；頭部からウェストまでが描かれているもの（多くは肩までである。以下これを胸像群と称す。）

C；頭部から下半身までを描いているもの（足の描かれていないものを含む。以下これを全身群と称す。）

なお、人物によって部位が異なる場合は、最も大きな部位の描かれている人物を基準と

して分類した。

また、同時に実施した父母との関係に関するアンケート調査やSCTの反応語との関連について分析することとした。

## 5 実施結果

### (1) 家族画

#### ア マンガ絵と写実絵

マンガ絵と写実絵の各出現度数を、人物の部位別に集計したのが、表4である。

この表から、「マンガ」群が「写実」群の

表4 家族画の人物の部位別出現度数

	総数	顔面群	胸像群	全身群
マンガ絵	175 (67.8%)	25 (9.7)	65 (25.2)	85 (32.9)
写実絵	83 (32.2%)	8 (3.1)	40 (15.5)	35 (13.6)
計	258 (100%)	33 (12.8%)	105 (40.7%)	120 (46.5%)

( ) 内は全体に占める割合

2倍強であり、全体の約2/3を占め、人物画の表現に写実よりもマンガ的手法が多く用いられることが確かめられた。

人物の部位別では、全身像を描く者が半数近くいる。特に、「マンガ」群では、全身像を描く者が全体の約1/3と多く、「マンガ」群の方が全身を描きやすいように思われた。

「写実」群では、胸像を描く者が多いが、ほぼ似たような比率で、全身像を描く者がおり、「写実」群では顔面像は少ないということがわかった。

### イ 家族画の中の自分

家族画の中に、自分を描くかどうかに着目して分析した。実施に当たっては、前述したとおり、特に自分については指示しなかったが、描き終わった後に、絵の説明をさせている施設とそうでないところとが違って、実施方法にやや統一性を欠いており、その影響を受けていることも考えられる。

その結果、「マンガ」群には、自分が含まれているものが49%であるのに対し、「写実」群では描かれていない方が多く、54%で

表5 家族画の中の自分の位置

	計	中央	端	左右	その他
マンガ群	86 (100%)	31(36.0%)	25(29.3)	29(33.7)	1(1.2)
写実群	30 (100%)	10(33.3%)	15(50.0)	4(13.3)	1(3.2)

ある。次に、この自分が描かれている場合、その位置はどうか調べてみた。描かれた人物との位置関係でとらえた結果が表5である。

「端」というのは、3人以上の人物が描かれていて、その一番端（左右を含む）ということであり、「左右」というのは、2人の人物が並んでいて、そのどちらかが自分ということである。その他は、自分が下端であったりした場合である。

自分を中央に描いている率は両群ともに1/3で、「マンガ」群の方がやや比率が高  
**（質問）「進学や勉強の相談をしたことがありますか。」**

	よくある	ときどきある	あまりない	全くない	無回答
マンガ群	10(5.7%)	25(14.3)	53(30.3)	51(29.1)	36
写真群	4(4.8%)	26(31.3)	19(22.9)	21(25.3)	13

「あまりない」と「全くない」を合わせると、「マンガ」群が59.4%、「写真」群が48.2%であり、「マンガ」群の方に相談しない者が多い。女子においては、非行少年よりも一般群の方が「よくある」「ときどきある」を選ぶ傾向が認められていることと考え合

いものの近似値である。端に描く率に大差が見られ、「写真」群の半数が自分を端に描いている。

(2) 家族画と質問紙調査との関連分析

家族と友人に関する質問紙調査と家族画との関連性を、先に述べた「マンガ」群と「写真」群に分けて、比較検討を行った。以下に特記すべき質問項目とその結果を列挙する。

ア 父親との関係

**（質問）「お父さんは、あなたの気持ちをわかってくれますか。」**

	よくわかってくれる	まあわかってくれる	あまりわかってくれない	全くわかってくれない	無回答
マンガ群	18(10.3%)	65(37.1)	33(18.9)	24(13.7)	35
写真群	16(19.3%)	17(20.5)	19(22.9)	17(20.5)	14

「マンガ」群では「まあわかってくれる」という者が非常に多いのに対し、「写真」群では、「よくわかってくれる」と「全くわかってくれない」の二極に分かれる。「マンガ」群では、一応父親に受容されていると感じている者が多いの対し、「写真」群の中には、

「マンガ」群の方が非行少年群に似ているということが言えるのかもしれない。

因みに、直接「頼りにしているか」という質問に対しては、「マンガ」群と「写真」群にほとんど差はない。

受容されていると感じている者と全く受容されていないと感じている者がいる。「全くわかってくれない」と「あまりわかってくれない」を合わせてみると、「写真」群の方が高率であり、受容されていないと感じている者が多い。

**（質問）「帰宅時間について厳しい方ですか。」**

	非常に厳しい	厳しい	あまり厳しくない	厳しくない	無回答
マンガ群	11(6.3%)	46(26.3)	53(30.3)	28(16.0)	37
写真群	10(12.0%)	14(16.9)	26(31.3)	20(24.1)	13

両群ともに「あまり厳しくない」の回答が最も多い。次いで、「マンガ」群では「厳しい」が、「写実」群では「厳しくない」が多

い。「マンガ」群の方が父親への不満がありそうである。

(質問)「お父さんから言われたことを守りますか。」

	よく守る	大体守る	ときどき守らない	ほとんど守らない	無回答
マンガ群	2(1.1%)	12(6.8)	45(25.7)	80(45.7)	36
写実群	1(1.2%)	6(7.2)	31(37.3)	31(37.3)	14

「マンガ」群では「ほとんど守らない」が半数近くある。「写実」群では、「ときどき守らない」と「ほとんど守らない」が同率であり、「ほとんど守らない」の比率は若干低いことから、「マンガ」群に比較すれば、父

親への服従傾向がうかがえる。他の研究の結果で、非行群女子において、父親への服従のなさが顕著なことが明らかにされているが、「マンガ」群にその傾向が著しいということがいえる。

(質問)「あなたにうるさく言いすぎると思いませんか。」

	よくある	ときどきある	あまりない	全くない	無回答
マンガ群	30(17.1%)	43(24.6)	51(29.1)	15(8.6)	36
写実群	9(10.8%)	28(33.7)	16(19.3)	17(20.5)	13

「マンガ」群では「あまりない」が最多であるのに対し、「写実」群では「ときどきある」が最多であり、やや干渉されると思っている者が多い。しかし、次いで、「マンガ」

群には「ときどきある」が、「写実」群には「あまりない」「全くない」が比較的似た数値であり、両群に大差はない。

(質問)「お父さんとあなたの関係はうまくいっていますか。」

	うまくいっている	まあうまくいっている	うまくいっていない	全くうまくいっていない	無回答
マンガ群	23(13.1%)	69(39.4)	23(13.1)	25(14.3)	35
写実群	16(19.3%)	28(33.7)	12(14.5)	13(15.7)	14

両群とも、全体的に「うまくいっている」「まあうまくいっている」の回答が過半数を

占めている。  
イ 母親との関係

(質問)「困っているとき、お母さんを頼りにしたことがありますか。」

	よくある	ときどきある	あまりない	全くない	無回答
マンガ群	57(32.6%)	57(32.6)	26(14.9)	13(7.4)	22
写実群	22(26.5%)	30(36.1)	19(22.9)	7(8.4)	5



「あまりない」「全くない」を合わせた比率は「写実」群の方が高く、母親を頼りにしていない者が多い。

**(質問) 「進学や仕事のことでお母さんに相談したことがありますか。」**

	よくある	ときどきある	あまりない	全くない	無回答
マンガ群	33(18.9%)	65(37.1)	35(20.0)	20(11.4)	22
写実群	22(26.5%)	30(36.1)	17(20.5)	10(12.0)	4

「写実」群では、「よくある」「ときどきある」が合わせて62%を占め、具体的なことからの処理においては母親に依存している。それに対し、「マンガ」群では「ときどきある」が最多である。

**(質問) 「お母さんは、あなたの気持をわかってくれますか。」**

	よくわかってくれる	まあわかってくれる	あまりわかってくれない	全くわかってくれない	無回答
マンガ群	49(28.0%)	63(36.0)	27(15.4)	13(7.4)	22
写実群	20(24.1%)	27(32.5)	22(26.5)	8(9.6)	6

「マンガ」群の方がやや受容されていると感じている者が多い。

**(質問) 「あなたはお母さんの考えや気持がわかっていますか。」**

	よくわかっている	まあわかっている	あまりわかっていない	全くわかっていない	無回答
マンガ群	27(15.4%)	78(44.6)	30(17.1)	17(9.7)	23
写実群	10(12.0%)	33(39.7)	22(26.5)	12(14.5)	6

「マンガ」群では、母親を受容できていると感じているのが60%と高率である。「写実」群も受容できる者が過半数を占めるものの、「あまりわかっていない」「全くわかっ

ていない」とする者も40%おり、母親を受容しようという構えの希薄な者の存在が窺える。

**(質問) 「お母さんとロゲンカになることがありますか。」**

	よくある	ときどきある	めったにない	全くない	無回答
マンガ群	51(29.1%)	60(34.3)	29(16.6)	13(7.4)	22
写実群	33(39.8%)	24(28.9)	18(21.7)	3(3.6)	5

「マンガ」群と「写実」群とを比較すると、  
「マンガ」群の方が母親への反感、反発は少

(質問) 「お母さんとあなたの関係はうまくいっていますか。」

	うまくいっている	まあうまくいっている	うまくいっていない	全くうまくいっていない	無回答
マンガ群	53(30.3%)	70(40.0)	13(7.4)	15(8.6)	24
写実群	21(25.3%)	40(47.4)	9(10.8)	7(8.4)	6

両群ともに、総じて7割の者が「うまくいっ

(質問) 「あなたのお母さんのようになりたいですか。」

	思う	思わない	無回答
マンガ群	70(40.0%)	83(47.4)	22(12.6)
写実群	35(42.2%)	39(47.0)	9(10.8)

両群ともに約半数近くが「思わない」と答

(質問) 「家族と一緒に夕食をとることがありますか。」

	いつもとる	ときどきとる	たまにとる	全くない	無回答
マンガ群	26(14.9%)	45(25.7)	61(34.9)	36(20.6)	7
写実群	9(10.8%)	23(27.7)	30(36.1)	15(18.1)	6

両群ともに夕食を一緒にとる度合いが少ない。非行のない一般群の女子では、「全くない」が0%であることを考えると、両群ともにほぼ20%ということはかなり高い数値である。「マンガ」群の方が「いつもとる」と答えた比率は少し高いものの、両群に大差はない。

### (3) 家族画とSCTとの関連分析

SCTの反応の分類については、刺激語に対する反応を6つの評定に分類し、非行群と一般群の特徴を検討した。

評定1 肯定 反応語が対象を感情的に受容しているか、又は受容されている内容を示すもの。

評定2 否定 反応語が対象を感情的に否定したり、又は拒否の状態を示すもの。

評定3 両価 反応語に好嫌の感情が同時に表現されているもの。

評定4 中立(±) 反応語が事実関係や自分の考えを述べたもので、価値評価が含まれないか、又価値評価が困難なもの。

評定5 中立(+) 中立的反応のうちで、事実関係や自分の考えを述べたものであるが、価値的に好ましいもの。

評定6 中立(一) 中立的反応のうちで、事実関係や自分の考えを述べたものであるが、価値的に好ましくないもの。

※0は無回答  
家族に関する刺激語に対する反応を評定別にしたものが表6である。

表 6 SCTの反応の評定別出現度数

SCTの刺激語 \ 評定		1 肯定	2 否定	3 両価	4 中立(±)	5 中立(+)	6 中立(-)	0 無回答
家の中で 私は	マンガ群	7(4.0%)	21(12.0)	3(1.7)	42(24.0)	18(10.3)	84(48.0)	—
	写実群	1(1.2)	12(14.5)	1(1.2)	25(30.1)	6(7.2)	38(45.8)	—
お母さんは	マンガ群	87(49.7)	19(10.9)	18(10.3)	9(5.1)	21(12.0)	21(12.0)	—
	写実群	34(41.0)	12(14.5)	12(14.5)	6(7.2)	8(9.6)	11(13.3)	—
お父さんは	マンガ群	45(25.7)	31(17.7)	21(12.0)	20(11.4)	14(8.0)	44(25.1)	—
	写実群	22(26.5)	15(18.1)	10(12.0)	10(12.0)	6(7.2)	20(24.1)	—
家にいると	マンガ群	39(22.3)	32(18.3)	5(2.9)	44(25.1)	7(4.0)	48(27.4)	—
	写実群	20(24.1)	27(32.5)	3(3.6)	9(10.8)	3(3.6)	21(25.3)	—
私の家は	マンガ群	37(21.1)	18(10.3)	3(1.7)	70(40.0)	17(9.7)	26(14.9)	1
	写実群	12(14.5)	17(20.5)	2(2.4)	31(37.3)	5(6.0)	14(16.9)	1

いずれの刺激語においても、「写実」群の方が、「肯定」が少なく、「否定」が多い。その中でも、「家にいると」と「私の家は」の刺激語に対する反応にその傾向がより顕著に認められた。

次に、今回「家がいやになるのは」という刺激語を取り上げ、「親のせい」「自分のせい」「その他」に分けて比較してみた。「親のせい」というのは、「親がうるさい」「親がけんかする」「厳しい」「叱られるから」といった反応であり、「自分のせい」は「私のわがまま」がほとんどであり、「その他」は、「家族とより友達という方が楽しい」「外へ行く」「ない」「一人になる時」などである。

その結果は、「マンガ」群の方に、「親のせい」「自分のせい」ともに多く、それぞれ50%、17%である。それに対し、「写実」群は同じく36%、13%であり、その他が多い。「マンガ」群の方が家族との接触が多く、ためにあつれきも生じやすいのに対し、「写

実」群は家族との情緒的交流の希薄さや感情の抑圧が窺える。

(4) 処遇課程及び非行と家族画の関連分析  
当榛名女子学園の在園者について、分類級別及び非行との関連性について分析を行った。対象者は63名で、うち「マンガ」群47名、「写実」群16名である。この出現度数は、「マンガ」群が75%にあたり、全体の67.8%に比べやや高い比率である。

分類級別というのは、生活指導課程、特殊教育課程、教科教育課程といった処遇課程を細分したものであり、今回は、生活指導課程をG<sub>1</sub>、G<sub>2</sub>、G<sub>3</sub>に分けてその分布を調べてみた。因みに分類記号の意味は次のとおりである。

- G<sub>1</sub>: 性格の偏りが著しいため、特に個別的・治療的な指導を必要とする者
- G<sub>2</sub>: 限界知、幼稚な行動様式等人格の未熟さがあり、統制のきかない行動傾向が目立つ者

G<sub>3</sub>: G<sub>1</sub>, G<sub>2</sub>以外の者

集計結果は次表のとおりである。

表 7 分類級別出現度数

	G <sub>1</sub>	G <sub>2</sub>	G <sub>3</sub>	その他	計
マンガ群	4(8.5%)	10(21.3)	32(68.1)	1(2.1)	47
写真群	2(12.5%)	6(37.5)	8(50.0)		16

当園全体としては、G<sub>3</sub>が過半数を占め、G<sub>1</sub>が約20%、G<sub>2</sub>が25%程度であることからみると、「マンガ」群にG<sub>3</sub>が多く、「写真」群にG<sub>2</sub>の多いことがわかった。

次に非行との関連性についてまとめたのが表8である。非行は、送致決定時の主な非行である。

表 8 非行名別出現度数

	ぐ 犯	覚せい剤	窃 盗	毒劇物	傷 害	その他
マンガ群	20(42.6%)	12(25.5)	7(14.9)	4(8.5)	2(4.3)	2(4.3)
写真群	5(31.3%)	4(25.0)	1(6.3)	3(18.8)	1(6.3)	2(12.5)

これで見ると、「マンガ」群では、ぐ犯、覚せい剤法犯、窃盗が多い順である。これに対し、「写真」群では、同じくぐ犯が第一位であるが、その比率が「マンガ」群のそれより低く、二番目に多い覚せい剤法犯との差が小さい。そして三番目は、毒劇物法犯であり、これは「マンガ」群より10%も多い。即ち、「写真」群には薬物乱用者の多いことがわかった。

#### (5) 事例

今回取り上げたマンガ絵を描いた中から、これまで見てきた結果に該当すると思われる事例を紹介する。

##### ア 入院までの経緯

17歳。ぐ犯。施設歴はない。この調査や家族画を実施した時、本人は入院してから7ヵ月経っているのに、まだ2級上生であった。ぐ犯の内容は、少年院仮退院した中学時代からの友達との結びつきが強く、その少年と一緒に家出、徒遊、不純異性交遊、売春行為などを行っているうちに、新宿で覚せい剤

を射ってもらうようになって、保護された。

##### イ 家庭状況

父親が酒乱気味で、仕事はするものの（大工職人）、夫婦仲が悪い。母親に対して本人は小学高学年のころから、弟妹と自分とを差別するとして、母との葛藤が絶えず、家に安定できない。両親は実父母である。母にしてみると、本少年は、口が達者で、親にもウソをついてごまかす状態であり、自分の娘の指導に困り果てていた。また弟妹に悪影響が出ることを非常に恐れている。父親に相談にのってもらうこともできず、感情的に本人を叱責するだけであり、保護力は乏しい。

##### ウ 家族画

家族全員を画面いっぱいに描き、明るい雰囲気である。母親が中央で、左に父、右に弟で、その3人は立像であり、その前に本人と妹が座って、写真を撮るところである。カメラのシャッターの「カシャ」という音を文字で書き入れ、現像してでき上がる写真の印画紙を示す線も描かれている。前に座った妹と本人の下半身は、写真ができ上がった時には

切り取られることになる。父と弟には口が描かれていない。

家族全員が両手をポケットに入れたり、後にかくしている。人物の線を色鉛筆で濃く縁取りをし、中を斜めにうすく塗っており、全体のバランスも色の塗り方の強弱も絵心や感性の豊かさを窺わせ、絵の上手な方である。

父と弟には年齢差が感じられるが、母、本人、妹はほぼ似たようなスタイルであり、説明がなければ区別できない。母と妹は同じショートカットで、本人のみ長い髪であり、前髪のところにはサクランボのゴムの飾りをつけており、一番幼い印象である。

また、父と妹の服装の色は、上着、ズボンともに同じであり、本人のは、その色を上下逆にしたものである。マンガ絵のせいもあって、全員スタイルはよく、足長でスマートであり、都会的な感じが強く、地方都市育ちの本人の家族の実際とは、ほど遠い感じである。

#### エ 質問紙調査の結果

両親に対し、頼りにはしても、具体的なことで相談することはなく、親を受け入れ、親の気持を理解しようとの構えは乏しい。父親には、少し受容されていると思っており、父の言うことは、ときどき守らないことはあっても一応従う気はあり、反発することもめったにない。しかし、母親には受容されているとの気持が乏しく、その言いつけに従わず、干渉されると思っており、よく反発しては、口げんかしている。総じては、両親との関係は、まあうまくいっていると思っている。

父親、母親との良い点を挙げることができず、父には強引なところを直してもらいたい、母には親らしいことをしてもらいたいと望んでおり、お母さんのようになりたいとは思っていない。

#### オ SCTの結果

「家がいやになるのは」お母さんとうまくいかないからであり、「家にいると」つまらないと感じている。お母さんに対しては、

「昔嫌いだったけど、今は普通」と表現できるようになっている。お父さんに対しては、「いる」とのみ記述するにとどまっており、交流や情緒的結びつきの希薄さが表れている。

兄弟は「へんな奴」と思っているが、「家の中で自分は」という刺激語に対し「問題児である」と反応しており、自覚はしている。

#### カ 保護者の回答

母親の心配は、小学校のころは「少し心配」だったのが、中学生のころには、「性質」「友だち関係」「親子関係」いずれにおいても、「とても心配」するようになっている。

#### キ 当園での面会

在院中（本人は1年2ヵ月間在院した）父親は一度も面会に来なかった（住居は、極めて近い方であるにもかかわらず）。母親は、ほぼ毎月来ていたが、入院当初は、母がくどく過去のことや入院前の友人関係のことを愚痴るために、面会場面で双方とも感情的になって大声で怒鳴りあうなど険悪な状態が見られたが、働きかけを受入れ、自分のわがままさに気づくようになってからは、毎月来てくれることへの感謝の気持を表現できるようになった。

#### ク 処遇経過

入院1ヵ月位の間はおとなしく指導に従っていたが、その後対人関係での好き嫌いの感情をストレートに出すようになってはトラブルを起こしたり、非行の原因も親の態度が悪いとの考えが抜けきらず、また、わがままも出て、改善意欲が見られなかった。たびたび個別処遇をくり返したり、ワープロの資格取得に目標を設定させるなどして指導していった、やっと社会復帰に達した。社会復帰後は一日も早く親元を離れ、自活したいとの強い気持は変わらなかった。在院中、父親の面会があれば事態が変化することが期待され、母親を通して働きかけたが、それに応じてくれない父親であれば、本人の居心地が良くないのも仕方のないことかもしれない。

## 6 まとめと考察

女子少年院在院者の家族画について、今回は、マンガ絵と写実絵という観点から分析を行った。その結果、以下のようなことが明らかになった。

- ①マンガ絵は、全体の約2/3を占め、圧倒的に多い。
- ②人物画の部位別では、「マンガ」群に頭部顔面のみを描く者の割合が多く、「写実」群の約3倍である。
- ③施設別にマンガ絵の出現率を見てみると、比較的集団の規模の大きいところが高い率になっている。
- ④家族画のテーマで描かせた場合、概ね半数近くは自分を描くが、「マンガ」群の方が、「写実」群よりわずかながら自分を含める率が高い。
- ⑤その場合、自分を中央に描く者は、「マンガ」群も「写実」群も約1/3で同率であるが、「写実群」では、自分を端の方に描く率が高い。
- ⑥父親との関係についてみると、「マンガ」群の方が父親と相談することのない者の率が高く、また、父親の言うことに従おうとする気持の乏しい者が多い。
- ⑦母親との関係についてみると、「マンガ」群の方が母親に依存し、受容されているという感じを抱き、また、母親を受容しようとする気持も見られる。反発しての口げんかもときどきするが、よくするのは「写実」群の方である。
- ⑧SCTとの関連で見ると、「マンガ」群の方に、家がいやになる原因は、親のせいであり、また、自分のせいでもある者が多いのに対し、「写実」群では、中立的記述が多く、対人面でのかわりの希薄さや、意思表示の弱さがうかがえる。
- ⑨分類級別では、「写実」群の方が、G<sub>1</sub>とG<sub>2</sub>、特にG<sub>2</sub>の占める割合が高いことがわかつ

た。

⑩非行との関連では、「マンガ」群では、多い順に、ぐ犯、覚醒剤法犯、窃盗であるのに対し、「写実」群では、ぐ犯、覚醒剤法犯、毒劇物法犯の順であり、薬物関係の非行が多い。

以上の結果を考察するに当たり、これだけ多数のマンガ絵の家族が描かれていることの意味付けを考えてみる。

この「マンガ絵」という分類を行うに当たっての定義をくり返すと、「大きな目で、しかもその全部を黒く塗りつぶして、ひとみや白い部分が欠如しているか、または、単に一本の線で目を表していること、及び、鼻が省略されている人物」である。

このようなひとみや白い部分と黒い部分のない目について、HTPにおける高橋氏の解釈によると、「閉じた目やひとみのない輪郭だけの目は、自分の空想や感情に深く入り込み、自己愛が強いために外界を自分から遮断しようとし、自発性を失っている状態」という。また、「大きい目は、警戒心や猜疑心に関連する、そして、女子の方が男子より大きい目を描き、発達的には小学生の方が大きい目を描き、中学生になるとその率が低くなる」という。

本研究において上記の解釈を直接適用できない理由がある。その一つは、マンガ絵ではHTPの解釈における目とは逆に、目の下側の輪郭のないことが多く、しかも黒く塗りつぶされているので、全体が白目になっている状態とは様子が異なる。その理由の二つ目はマンガは、今や単に子供向けではなく、重要な情報伝達的手段として、大人の世界にも通用し、むしろ難解な内容をわかりやすく解説するのに適するとして積極的に導入されたりしている現状である。

ところで、実際にマンガ絵で表された家族画をみてまず感じることは、親と子の年齢差

が感じられず、子供を養育し、保護するという親の主導的立場が失せている印象が強いことである。また、人物の存在感の乏しさも否定できない。例えば、朝の登校時に父親に服装のことで注意されているところという説明のある家族画でも、注意されていることの重みがなく、軽い感じになっている。

このことに関し、丸文字いわゆるマンガ文字についての研究を行った山根一眞氏は、一マンガ文字はマンガに影響されたのではないとして、変体少女文字という言い方をしているが一この文字の出現によって、非常に内容が軽く扱われるようになったこと、この文字を使う意識構造には、「かわいいものを受容する、言い換えれば、弱々しさ、幼さをもちながら、姿かたちがきれいなことを至上とする価値観がある」と指摘する。弱く、幼く、愛らしく装うことで、共通の世界に生き、相手に自分の存在感を感じさせず、相手から拒否されることもない生き方、言い換えれば、自我や個性を追い払い、誰もが同じ自己を共有して、他人との壁は希薄になることを望んでいるという。

今回の家族画の実施に当たって、本来個別が望ましいのを集団で実施したことや、家族から切り離されて久しいために、家族との生き生きした接触が断たれていて観念的になりやすいといった条件も全く無視するわけにはいかないものの、マンガ文字を使用する世代に共通する心理構造があるように思われる。即ち、劣悪な家庭状況を直視せず、軽い調子で受けとめてしまうこと、また、皆と同じに振舞いたい心理的メカニズムがあるものと考えられる。女子少年院の中でも、比較的集団規模の大きな施設においてマンガ絵の出現率が高いことはこうした状況を反映しているものと思われる。

以上のようなことから、今回着目したマンガ絵と写実絵については、次のような考察が考えられる。

①マンガ絵では、親の権威も大人と子供の年齢差も明確でないが、これは、家族と友人に関する調査の結果で、父親に対し、服従的でないことを考え合わせると、父親との関係が不良なために規範意識の取り入れが円滑に行われていないといったことが考えられ、女子は、男子に比べて父親との関係が悪いといわれていることを裏付けるものかとも考えられるが、この点については、今後さらに分析を行う必要があると考える。

②家族画の実施状況からすると、マンガ絵の方が人の模倣やヒントを得やすかったものと考えられるが、いずれにしても女子少年の同調傾向の表れではないかと考えられる。

③女子少年院の中で、マンガ絵を描く者は、いわゆる女子の非行少年の、ある意味で代表的もしくは典型的なタイプであり、父親との関係が極端ではないものの、不良で、父親に相談したりすることがなく、その言い付けに従わず、反発しやすい。母親との関係では、概ね良好であり、母親の気持を受け入れようとしていて、父親に対する態度に比較すれば親和的である。家にいるのがいやになることはあっても、冷静になって考えれば自分のわがままだということを認めることもできる。

これに対し、写実絵を描く者は、家族の中では、母親よりも父親に依存しがちであり、父親の言うことにもある程度服従する。ただ、はっきり意思表示ができず、対人面では萎縮したり、幼稚な行動を取りやすく、非行も逃避的な色彩のものにはしりやすいといった傾向がうかがえる。